
月夜の下の気持ち

三亜野 雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の下の気持ち

【Nコード】

N7404C

【作者名】

三亜野 雪子

【あらすじ】

Mutuallove・・・の番外編です。シェイとローウエのお話。

雲が広がった夜の空は真暗で何も見えない。藍色の髪をした青年は蒼い瞳をそんな空に投げて、微動だにしなかった。群青色のマントは光の無いこの場所では黒にしか見えなく、彼が動くことが無ければ大抵の人は気付かずに通り過ぎてしまっただろう。

「今日は月見えねえな」

青とは対照的な燃えるような赤い髪をした同い年くらいの青年が彼の元へ歩いてくる。クセのある髪に似合う陽気な声に藍色の髪の青年は無愛想に呟く。

「ああ。そっだな」

「月綺麗なのにな。こういう日は勿体無いよなあ」

「俺は嫌いだけどな」

ぶっきら棒に答えて彼は身をひるがえ翻した。赤髪の青年は慌てて後を追う。はたらくマントをじっと見つめながらも、先ほどの意味深な言葉の意味を聞くことはしなかった。

それは、二人の間にある暗黙の約束があるから。

「シェイ、明日は早いからな」

「いつもギリギリに起きているのはお前だろ。ロー」

そして、シェイ・ホープ・ランとローウェ・ハース・イエーの二人は光のない方へ消えていく。

賞金首を引き渡す場所から離れて、二人は満足そうな顔で食堂へ入っていく。今日倒した獲物の金額を数えてローウェは感嘆の声を上げた。

「すっげ。これだけ取れたのは初めてだ」

「確かにな。だけど、お互いそれなりに腕はいいから当たり前じゃないか？」

「一人増えるだけでこれだけ違うんだなあ」

一人増えるだけで、というのはシェイ達のレベルで言えばだということに二人は気付いていない。分け前をきっちり半分に分けて、ローウェはシェイに手渡した。

それを自分の財布に入れていた姿を一瞥して、ローウェはにんまりと笑う。

「な？組んでよかったろ？」

「まあな。だけど、別に一人でも不自由してなかったし、あんな変な誘い方してきたら誰だって逃げるだろ」

半目にしてその時のことを思い出す。

『なあ、お前シェイ・ホープ・ランだよな？』

『……………』

『俺ローウェ・ハース・イエー！俺達お似合いだから、一生一緒にやっついていかないかい？』

『……………ホモならホモらしくホモ同士で一生ホモってる』

「いやいやいや、あれは逃げてない。逆にホモを強調して俺を苛めてただけだろ？」

「あ？そうか？普通の反応だぞあれ」

嘲笑してローウェを軽くあしらう。傍目はためから見ればかなり仲のいい二人だが、おそらくシェイはそれを否定するだろう。ローウェはがっくりと肩を落として運ばれてきた料理に手をつける。

「食わないのか？」

「いや、今はいい。明日は反対側だよな？」

「そうだけど……。今日もどつか別の所で寝るのか？」

立ち上がったシェイにローウェは確認を取る。一瞬不愉快そうに顔を歪ませたが、小さくあぁという返事を返して彼はスタスタと歩いていく。

テーブルに頬杖をついて、ローウェは息をついた。

「今日も……………女か。元気だねえ」

いや、心は元気じゃないから女なんだよな。

暗黙の約束。それは互いに互いの過去のことを詮索しないこと。それは最初組んだ瞬間に雰囲気であわされていた。ローウェも探られたくない過去がある。そして、シェイにも。それ

だから二人は組むことができたのかもしれない。互いに互いのことを理解できるから。

「ん、はあ」

艶めかしい声音が部屋に響く。昼間あれだけ動いたというのに全く疲れを感じていなかった。疲れがなければ彼はちゃんと眠ることができない。

だから、今この場にいる。

「あつ、……………んん」

女の声だけが部屋に響く。まるで一人しかいないかのように。ベットの上で踊り続ける彼女の秘めた部分に更に強く指を侵入させながら、シェイの心は現実とはかけ離れた場所にあった。

「はあっ…!!あつ、やつ…!!」

ぴくんと身体を跳ねさせる女に荒く触れながら、シェイは本能の快感に溺れていく。

山のせいか陽が沈むのが早かった。赤く燃える空の下で、二人は木々の陰に隠れる。目的の賞金首のアジトに狙いを定めてそれぞれ剣を手に取る。人数はたったの五人。二人にとつたらかなり美味しい状況だ。
そして合図もなしに同時に走り出す。

「何だ貴様等は!!！」

「さあな！」

まずは一人。ローウエが剣の柄で敵の脇腹に攻撃を入れる。かなり地味な攻撃だが、彼の力を見た目では量れないほど強い。

「この野郎!!！」

「遅い」

更に一人。シエイは敵の腹に蹴りを入れて剣の腹で殴りつけて気を失わせる。
流れるように闘いは続く。ローウエは更にもう一人、シエイも続けて一人。汗一つ流すことなく敵は倒されていく。

「弱……………」

「ん？あれ…………何か忘れているような」

何か足りなくて、ローウエは首を傾げる。だが、その疑問はすぐに解消される。

後ろの空気が揺れ動くのを感じて二人は振り返る。だが、一瞬反応は遅く最後の敵が振った剣が運悪くシェイのマントに引っかかる。破れるとまではいかなかったが、掛かっていたマントは剣に攪かくわられる。

「ちつ、余計なことを」

苛いらつきで舌打ちを不意にし、シェイは感情任せに肘を食らわした。見事それは顔に入り、鼻血を噴きながら地面に尻餅をつく。少し気の毒そうにローウエが敵を見ている間に更にシェイは頭に蹴りを入れて気を失わせた。

無数の…………キズ跡。

マントの下に隠れていた傷跡を彼は黙認した。シェイは無造作にマントを羽織おほり、傷跡を隠した。

陽は既に沈みきり、空には綺麗な満月が姿を現していた。

「月は………嫌いだ」

誰にも聞かせるつもりなどないような呟きが零れる。二人は何も口にせず月を眺める。

蒼い瞳を揺らして、その月にあの時の思いを重ねる。

光もない夜。

聞こえるのは母親の叫びと

自分の泣き声。

その時に必ず見えるのは

美しいと思える月。

残酷な光を帯びた

恵みの月。

「月は……憎い」

掠れた声で言った。その言葉にローウエは顔をしか顰める。
満月の夜。そんな日は彼にも他にはない思い入れがあった。しかし、
シェイとはまた違う感情。

『お前、抜け出したいんだろ？』

満月の夜。

一人で何もせず月を眺めていた。

そんな時、あいつが来たんだ。

「俺は、月は特別なんだ」

あの時、俺を救ってくれた。

あいつとの出逢い。

二人は剣をしまつて山を降りる。誰にも言えないものも同時に心の中にしまつて。淡く微笑む月の下で、その気持ちを抱きながら。

あの時と同じ満月の夜。赤髪の彼は同じような気持ちでそれを眺める。

緑色の瞳は光を反射してまるで宝石のようだった。

「思い出すな。あの時のこと」

近付いて来た者を見もせず認め、ローウエは微笑む。あの時は明らかに変わった藍色の髪の青年は、笑って隣に立つ。

「お前は変わったよな。シエイ」

「お前は変わらないよな。ロー」

軽く投げられた言葉に胸が痛んだ。数年前の自分を頭の中で思い描いて苦笑する。

そう、俺は変わらない。

変わったつもりだったのに。

だから、俺は明日……………。

「なあ、お前は今…幸せか？」

馬鹿なことを聞いていると彼も自分でわかっていた。しかし、シエ
イは笑い飛ばすこともなく、真剣な口調で返事を返した。

「ああ、今までで一番幸せだな」

隣に彼女がいて。

守るべき者がいて。

守ってくれる者がいる。

「ロー、お前は道を間違えるな」

少しだけ組んだ仲。ただちよつと一緒にいただけ。互いの闇も気持
ちを何一つ知らない二人。

けれど、それでも互いに無事であることを純粹に願える仲だった。

闇を知らないから、いや闇を知らないからこそ共にいて落ち着ける
そんな存在。それは逆に親友とも呼べるかもしれない。

「何言ってるんだよ。さあ、明日はアジトに行くんだから寝るぞ。キ
サラと一緒にいてやれよ」

きつと今頃不安で押し潰されそうになっているはずだから。

見透かされた気持ちに動揺した。それを隠すための言葉。
部屋に戻る彼の後ろを一瞥して、もう一度ローウエは月を見やる。

「ごめんな、ソウシ」

碧い瞳が彼を貫く。
金髪が身体が震える度に揺れる。頬に伝う綺麗な水は媚薬^{びやく}効果をも
たらし、彼に熱い感情を持たせた。

あつたかい。

キサラはこんなにもあつたかい。

ソウシにも

シェイにも

感じなかったこの温もり。

ありがとう。

「キサラ…ソウシを頼んだ」

もう、俺は充分温もりをもらったから。

だから、残りはあいつに。

一番お前のことを想って今でも苦しんでる俺の大切な人に。

「あいつを助けることができるのはお前だけだから」

俺はこの一瞬だけで生まれてきてよかったと思えるほど幸せをもらったから。

だから、もう、泣かないでくれ。

君が

好きだから。

ありがとう。

そして、

さようなら。

満月の夜。

二人は肩を寄り添って優しく見守る月を見つめる。

「俺は月は嫌いだった」

突然、シェイが小さく述べる。それを黙って聞いてキサラは彼の手を取る。

絡み合う指。温もりがそこから広がって安心が生まれる。

「でも、少しだけ好きになった」

こくん、と頷く。

彼と最後に過ごした夜のことを思い出して、シェイは目を閉じる。

様々な感情が世の中を駆け巡る。

怨^{うら}みが…

憎^{にく}しみが…

哀^{あは}しみが…

切^きなさが…

愛^{あい}しさが…

その全てを月は見守る。

「大丈夫、二人共あの月と同じように私達を見守ってくれるよ」

そんな空想的なことを信じているわけではない。けれど、あえてそういうことにして気持ちを紛らわせる。

そして、今晚。

月夜の下の気持ちが増える。

(後書き)

Mutual love・・・の番外編、いかがだったでしょうか？少しフライング的な話ですが、満足していただけただけなら嬉しいです。

Mutual love・・・を好んでくれる方、この話を気に入ってくれた方、感想評価を下されると非常に嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7404c/>

月夜の下の気持ち

2010年10月28日04時57分発行